

使徒 9 : 1-31、22 : 1-22、26 : 1-32

「サウロの回心：異邦人に遣わされた使徒」

聖書朗読

使徒 9 : 1-31

- 9:1 さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて、大祭司のところに行き、
- 9:2 ダマスコの諸会堂あての手紙を書いてくれるよう頼んだ。それは、この道の者であれば男でも女でも、見つけ次第縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。
- 9:3 ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした。
- 9:4 彼は地に倒れて、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」という声を聞いた。
- 9:5 彼が、「主よ。あなたはどなたですか」と言うと、お答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。
- 9:6 立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたのしなければならないことが告げられるはずです。」
- 9:7 同行していた人たちは、声は聞こえても、だれも見えないので、ものも言えずに立っていた。
- 9:8 サウロは地面から立ち上がったが、目は開いていても何も見えなかった。そこで人々は彼の手を引いて、ダマスコへ連れて行った。
- 9:9 彼は三日の間、目が見えず、また飲み食いもしなかった。
- 9:10 さて、ダマスコにアナニヤという弟子がいた。主が彼に幻の中で、「アナニヤよ」と言われたので、「主よ。ここにおります」と答えた。
- 9:11 すると主はこう言われた。「立って、『まっすぐ』という街路に行き、サウロというタルソ人をユダの家に尋ねなさい。そこで、彼は祈っています。
- 9:12 彼は、アナニヤという者が入って来て、自分の上に手を置くと、目が再び見えるようになるのを、幻で見たのです。」
- 9:13 しかし、アナニヤはこう答えた。「主よ。私は多くの人々から、この人がエルサレムで、あなたの聖徒たちにどんなにひどいことをしたかを聞きました。
- 9:14 彼はここでも、あなたの御名を呼ぶ者たちをみな捕縛する権限を、祭司長たちから授けられているのです。」
- 9:15 しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。
- 9:16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」
- 9:17 そこでアナニヤは出かけて行って、その家に入り、サウロの上に手を置いてこう言った。「兄弟サウロ。あなたの来る途中、あなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」
- 9:18 するとただちに、サウロの目からうろこのような物が落ちて、目が見えるようになった。彼は立ち上がって、バプテスマを受け、
- 9:19 食事をして元気づいた。サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちとともにいた。
- 9:20 そしてただちに、諸会堂で、イエスは神の子であると宣べ伝え始めた。
- 9:21 これを聞いた人々はみな、驚いてこう言った。「この人はエルサレムで、この御名を呼ぶ者たちを滅ぼした者ではありませんか。ここへやって来たのも、彼らを縛って、祭司長たちのところへ引いて行くためではないのですか。」
- 9:22 しかしサウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。
- 9:23 多くの日数がたって後、ユダヤ人たちはサウロを殺す相談をしたが、
- 9:24 その陰謀はサウロに知られてしまった。彼らはサウロを殺してしまおうと、昼も夜も町の門を全部見張っていた。
- 9:25 そこで、彼の弟子たちは、夜中に彼をかごに乗せ、町の城壁伝いにつり降ろした。
- 9:26 サウロはエルサレムに着いて、弟子たちの仲間に入ろうと試みたが、みなは彼を弟子だとは信じないで、恐れていた。

9:27 ところが、バルナバは彼を引き受けて、使徒たちのところへ連れて行き、彼がダマスコへ行く途中で主を見た様子や、主が彼に向かって語られたこと、また彼がダマスコでイエスの御名を大胆に宣べた様子などを彼らに説明した。

9:28 それからサウロは、エルサレムで弟子たちとともにいて自由に出はりし、主の御名によって大胆に語った。

9:29 そして、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちと語ったり、論じたりしていた。しかし、彼らはサウロを殺そうとねらっていた。

9:30 兄弟たちはそれと知って、彼をカイザリヤに連れて下り、タルソへ送り出した。

9:31 こうして教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行った。

はじめに

使徒 9 章には、非常に重要な出来事が記録されています。

ルカは、使徒の働きの中でこの出来事について 3 度も記しました。

今日はその 3 度のうちの一度目だけを読みましたが、他のふたつの個所も各自お読みください。

その個所は、使徒 22 : 1-22 と使徒 26 : 1-32 です。

聖書で同じことが繰り返されるのは大切だからですが、3 度繰り返されているのですから、これはとても重要だということです。

この話のおもな登場人物はサウロです。サウロは使徒 8 章 1 節で初めて登場しました。

使徒 8 : 1

8:1 サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らされた。

サウロは教養のある人でしたが、イエスが人の姿をした神であられ、人類の罪を贖うためにこの世に来られたということを受け入れていませんでした。

神の御子イエスの死による神の恵みについてはまったくわかっていませんでした。

旧約聖書の神の律法を信じ、従っている人でした。

後ほど、サウロの回心と背景がどのように彼の働きと新約聖書の教えを形成したかについてお伝えします。

今日の個所は 3 つに分けてお話ししましょう。

サウロの回心、サウロとアナニヤ、そして、サウロの教えと迫害の 3 つです。

今日の個所はおもにサウロについて書かれているように見えますが、神がすべての出来事を指揮しておられ、人の心と人生に素晴らしい業をなしてくださるのだということ覚えておきましょう。

また、サウロが回心してすぐに、イエスが他の信徒をサウロに関わらせられたのは興味深い点です。

1. サウロの回心 (9 : 1-9)

1-2 節には、ダマスコを訪れるサウロの目的が記されています。彼は、エルサレムからダマスコに向かう途上でした。会堂のクリスチャンを捕えてエルサレムに連行するための大祭司の許可書を持って、約 300km の道のりを旅していました。おそらく兵士たちを伴って旅していたと思われます。

サウロの回心の出来事で、いくつか注目すべき点があります。

まず、天からの光が彼を照らしたことです。(3 節)

スポーツのナイター試合に行くと、非常に明るい照明がスタジアムを照らします。

これらの証明は、試合が行われる会場を照らすためのものですから、観客は照明自体を見ません。

そんなことをすれば、目がおかしくなるでしょう。観客は試合に目を向けます。

一方、サウロの場合は違いました。この光は、栄光に満ちた天から差した自然を超越した光でした。突然のことで、サウロは地面に倒れました。

非常に明るいこの光は、サウロの注意を引き、彼をへりくだらせて、力あるお方がそこで起こっているすべてのことを指揮しておられることを示すためのものでした。

次に、天から語りかける声が聞こえました。(4 節)

天からの声は、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」と言いました。

天からとても大切な言葉が聞こえたのです。

これらの言葉は、クリスチャンの信徒に対する迫害が、主イエス・キリストに対する直接的な攻撃でもあると教えてくれます。

イエスはサウロに語られました。サウロは神に仕えていると思っているけれど、実際には神を迫害しているのだと、おっしゃったのです。

この声は、サウロに直接、名指しで語りかけました。

3 つめに、サウロが問いかけました。(5 節)

サウロはおそらく超自然的なことが起こっているとわかっていたでしょうが、あえて大切なことを尋ねました。

「主よ。あなたはどなたですか」と尋ねたのです。

4 つめに、天から答えがありました。(5 節)

「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」とその声は答えました。

英語の欽定訳は、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。突き棒に反抗するのはむずかしい」とありますので、これについて少し説明しましょう。

イエスは、天からの声のご自身の声であることを明かされた後に、このようにおっしゃいました。

「突き棒」とは昔の言葉で、家畜を追い立てるときに使う農機具を指します。聖霊に導かれることにサウロが抵抗していることを指しているようです。

サウロは、クリスチャンを捕まえることで神の働きに貢献していると思っていましたが、実際には神のみことばを拒否していました。言わば、突き棒に反抗していたわけです。

最後に、イエスからサウロへの指示があります。(6 節)

イエスからの指示は、立ってダマスコの町に行き、そこですべきことが告げられる、というものでした。

権力者サウロはへりくだらされ、信仰によってダマスコに行かなければなりません。そして、そこに行って、自分のすべきことと目的を覚えてもらわなければなりません。

9 節には、彼がダマスコに着いて 3 日間目が見えず、飲み食いしなかったとあります。

適用

a) 私たちは、イエス・キリストがどういうお方かについて 100%の確信が必要です。

サウロは、神に仕え、律法に従っていると思っていましたが、実際には神に反抗し、神に背いていました。そうってしまったのは、イエス・キリストがどういうお方であるかを彼が理解していなかったからです。

今の世の中では、ほとんどの異端がイエス・キリストの神性やイエス・キリストが成し遂げられた御業を信じる信仰によって恵みのゆえに救われるという福音を信じません。これらの異端や新興宗教団体は、キリスト教に似たものもありますが、イエス・キリストの神性と福音となると、これを受け入れません。代わりに、救いに至る規則や律法を自分たちが作ります。

1 月には、特別講師をお迎えして、イエス・キリストについて誤った解釈をしている 3 つのおもな団体についてお話してもらいます。ですので、今日はそれらの団体には触れませんが、「イエス・キリストに関する教理」をしっかりと学んでください。これは、もっとも重要な教理です。

私がフェイスミッション・バイブルカレッジの学生だったころは、「聖書の重要教義」という本を使っていました。英語版はネットで公開されています。邦訳は、古書を買うことができます。イエス・キリストに関する聖書の教えを理解することはクリスチャン全員にとって不可欠です。

b) 私たちの回心は私たちの任命だと理解する必要があります。

これはどういう意味でしょう。サウロにとって、回心が任命そのものでした。その重要な任務を与えられるのは後のことですが、彼は自らの回心をイエスに仕えるように任命されたと受け取りました。

私たちは、神の聖霊によって新生した瞬間からイエスのしもべであるべきです。

私たちが成長し、イエスに仕えていないなら、何かがおかしいのです。

多くのクリスチャンは、クリスチャン人生を漂流しています。碇のない船が海で波に流されるままに浮いているようです。

漂流する船がどうなるか、わかるでしょう。いつかは座礁するか、他の船にぶつかるかして、難破します。

数週間前にブラッドさんはメッセージの中で、「自分の居場所を見つけ」て仕えようと勧めてくれました。

自分にぴったりの居場所を見つけられるまで、いくつかの奉仕を試さなければならないかもしれませんが、試してみなければ、漂流し続けることになります。それは危険です。

2. サウロのバプテスマとアナニヤ (10-19 節)

新生したばかりのサウロは、ダマスコで 3 日間過ごしました。彼の目は見えないままで、まったく飲み食いもしていません。これは、イエスを受け入れたばかりのたいていの人が体験するような喜びの日々ではありません。周囲の人が新生した信徒に慣れる必要があったり、信徒自身が困難に対応しなくてはならなかったりで、イエスを受け入れてからのほうがたいへんだという人もいます。

11 節で、サウロは祈っていたとあります。彼は、正しいことをしていました。

また、アナニヤという人が来て、手を置いてくれると目が見えるようになるのを、幻で見たともあります。

ですから、サウロは未来に希望が持てました。

それらの祝福が与えられる前に、神はアナニヤという人の心を整えなくてはなりませんでした。

アナニヤにとって、サウロのところに行って手を置きなさいという神の促しに従うのは簡単ではありませんでした。それまでサウロはすべてのクリスチャンの敵で、エルサレムのクリスチャンからその悪評を聞いていたからです。(13 節)

イエスは、サウロを異邦人と王たちとユダヤ人への宣教師とすることをお持ちであることをアナニヤに告げられました。(15 節)

アナニヤは幻で語られたイエスの声に従いました。

そしてすぐ、サウロを探し当て、彼に手を置きました。するとサウロは目が見えるようになり、聖霊に満たされました。

目が見えるようになると、彼はバプテスマを受け、ダマスコの弟子たちとしばらく過ごしました。この話は劇的な展開ですが、とてもシンプルでわかりやすい内容です。

今日の箇所からどのようなことが適用できるでしょうか。

まず、神は私たちのために備えられた人や状況のために、私たちを整えられます。

これはどういうことでしょうか。

神は、サウロがクリスチャンの仲間に入って伝道者として仕えるために、彼を整えられました。

また、アナニヤがサウロに手を差し伸べるように彼を整えられました。同じように、私たちのために神が備えられた人がいます。そして、その人たちのために、私たちを整えられます。

私は、神戸で 4 年間宣教師として、英国で 20 年間牧師として奉仕しました。こうして、OIC の牧師になるために整えられているとは気付いていませんでした。

また、私はオークホールホリデー社のボランティア講師として 10 年以上奉仕しましたが、その経験から、OIC の教会員のためにイスラエル旅行を企画することができました。

オークホール社とのつながりがなければ、できなかったことです。

皆さんの境遇は私とは違いますが、神への奉仕の次のステップを踏むために、神は皆さんを整えておられます。

今与えられた働きで神に従うなら、神があなたの将来にご計画しておられることのために整えられるでしょう。

神の聖霊の働きに私たちが応答し、神のみことばである聖書に従うなら、神は主の道へと私たちを導いてくださいます。

箴言 3 : 5-6

3:5 心を尽くして【主】に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。

3:6 あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

次に、不名誉な過去の持ち主が新生したときに、その人を受け入れることについてです。

私たちが生きる現代社会は、神のみことばに真っ向から反対します。そして、クリスチャンの道徳観からは受け入れられないような行いも多々あります。

サウロを現代に置き換えるなら、クリスチャン殺害に関与していたイスラム教テロリスト、または暴力団員などでしょう。

そのような人たちがキリストを信じて回心すると、クリスチャンはその人たちの以前の生き方を見て、なかなか受け入れることができません。

けれども、その人たちが心から回心したのなら、私たちは彼らを愛し、仲間に迎え入れ、神がその人たちに備えておられる働きのために後押ししなくてはなりません。

今年のリトリートの特別講師は、過去の不名誉にもかかわらず、神が素晴らしいかたちで用いてくださっている人の例です。

神の御目には、私たちの罪もサウロの罪も同じであることを忘れてはいけません。

サウロはその働きで多くの苦しみを受け、イエスに仕える彼の人生は簡単ではありませんでした。

3. サウロの教えと迫害 (20-31 節)

20-22 節には、サウロがただちにイエス・キリストが神の御子であると教え始めたとあります。ユダヤ教の会堂でそのように教えました。

会堂の人々は、サウロが心を入れかえたことに驚きました。

けれども、会堂のユダヤ人たちはイエスについての教えを信じませんでした。

サウロは拒絶されてもめげず、聖霊に力づけられて、ユダヤ人をうろたえさせました。

ユダヤ人の考え方は、ユダヤ教に凝り固まっていました。ユダヤ教は、旧約聖書の律法に基づく律法的な宗教となっていました。元々のユダヤ教にいくつもの規則が追加され、イエスの御業による神の恵みは否定的に受け取られました。

ユダヤ人はサウロを殺そうと画策しましたが、彼は夜、かごに乗って町の城壁の外へと逃げました。

彼はやっとエルサレムに戻り、弟子たちの仲間に入ろうとしましたが、弟子たちはサウロを怖がりしました。イエスを信じる弟子となったというサウロの話信じなかったのです。

けれども、バルナバは彼の話信じました。

そして、サウロを使徒たちのところに連れていき、いきさつを話しました。

使徒たちは彼の証を信じたので、ギリシャ語を話すユダヤ人に向けて宣教することを許可しました。

残念ながら、そのユダヤ人たちもサウロを殺そうとしました。

サウロを暗殺する企てに気づいた信徒たちは、サウロをカイザリヤに連れていき、そこから故郷のタルソへと送り出しました。

この後、教会に平穏な日々が訪れ、信徒たちは信仰を養われ、聖霊が多くの人々を罪から救ってくださったとあります。

では、この個所からどのようなことが適用できるでしょう。

ひとつめは、サウロの最初の宣教の働きです。

サウロはすぐに、イエスが神の御子であると教え始めたとあります。

このようなサウロの教えは、生涯の働きにわたって継続しました。

彼が記した手紙はすべて、イエス・キリストと救いについてです。または、イエスに従うと言う人々の考え方や言動を正そうとする内容です。

コリント第一 1 : 20-25

1:20 知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。

1:21 事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。

1:22 ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。

1:23 しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、

1:24 しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。

1:25 なぜなら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

コリント第一 2 : 1-2

2:1 さて兄弟たち。私があなたがたのところへ行ったとき、私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。

2:2 なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。

私たちの課題は、伝道するときも教えるときも証をするときも、イエス・キリストの福音を伝えることに専念することです。

他にも大切なことがあるかもしれませんが、これが何よりも一番大切なことです。

イエスの再臨は大切です。ユダヤ人やイスラエルの地に対する神のご計画も大切です。

けれども、他のことを伝えるのに一生懸命になって、福音を伝えることから脱線してはいけません。

聖書の中心はキリストです。ですから、私たちは神の教えに従い、キリストを中心とした信徒でいなくてはなりません。

次に、サウロに対する二度の暗殺計画です。

9章は、サウロが「弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて」（1節）いたところから始まりました。そして、9章の終盤では、サウロに対する二度の暗殺計画があったと記されています。

この適用については、皆さんに誤解のないよう慎重にお伝えしなくてはなりません。

サウロは、悔い改めてイエスが赦しを与えてくださるお方だと信じたときに、罪赦されました。

しかし、人はまいた種を刈り取ると聖書は教えます。

これについて記された、5つの聖書箇所を挙げておきます。

（箴言 11 : 18、箴言 22 : 8、ガラテヤ 6 : 7-8、コリント第二 9 : 6、ルカ 19 : 20-21）

これらの箇所は、人が義の種をまくと、それに見合った報いを受け、不義の種をまくと不幸を刈り取ると教えます。

肉のためにまけば、肉のものを刈り取ることになりますが、御霊のためにまくなら、霊的なものを得ます。

私たちがケチであまりまかなければ、収穫も少なくなります。一方、経済的にも奉仕においても惜しみなくまけば、寛大な報いを得るでしょう。

そして、何もまかなければ、何も得ません。これはおもに、イエスに仕えることについてです。

ここで強調したいのはサウロについてです。

サウロは、9章1節で確かに不義の種をまいていました。そして、暗殺計画という不幸を後に刈り取りました。

ダビデもその一例です。彼は、神と神の御国に100%心を向けた人でしたが、愚かな選択をしたせいで、神の懲らしめを受けました。

ですから、私たちは神のみことばを惜しみなく正しくまく人であるように細心の注意を払い、信仰生活にも気を配る必要があります。

そうできるよう、聖霊をとおして神が助けてくださいますように。